

## 景年先生の追懐

木 島 櫻 谷

數へると、丁度三十二年前のことである。

初めて先師にお目にかゝつて、入門の挨拶をしたのが自分の十六歳の冬であつた。頼みにして居た父を失ふてから半年あまり後のことで、少年ながらも何彼につけて父が在世のときを思ひ出しては、新しい涙がまだ止まなかつた頃であつた。

ある學校を退いていよいよ自分の希望が遂げられて、好きな繪の道に入ることが出来たから、元來藝術の研究が深く入れば入る程唯是——無窮を追求する一の苦悶に外ならぬ——と云ふ實に容易でない仕事である事も知らずして、たと塾に通ふて繪筆をとることが無性にうれしかつたのである。自分の十歳頃までは先師は同じ町内の向側の家に住

まれて、宅とは四五軒ほどしか隔つて居なかつたから、幾人かの門人達が、唐紙の巻いたものや花の枝などを携へて、出入するのを見て居た。又表の部屋で給を習つて居るのを格子を越してよく見たこともあつた。自分が入門した時はそれより六年あまり後のことで、先師は丁度四十八歳であられたやうに覺えて居る。柳馬場三條上る所に移つて居られた頃で、景年花鳥畫譜の完成したのも此頃である。先師が中年後期の最も圓熟された時代で屏風なども随分大作が出来た様であつた。

それより少し前は御病氣がちで、何でも三四年も引續きに木屋町や、三本樹邊に出養生をして居られたさうであるが、自分のお目にかゝつた時は病氣も癒つて、頗るお元氣

のやうに見受けた。自分が去年入門當時の先師のお年と同じやうになつたかと思ふと、長く師事して居た先師が忽然と世を去られたのは何とした哀しい因縁であつたのか。

八十の高齡既に人生の稀に見るところとは云ひながら、自分としてはいつまでも先師が背後のある高い所から門人の行動を眺めて居らるゝことが、どれ程心強く感じることであるか。廣い世界の中に唯一人好感と善意を以て門人の行動を注視し同情し、鞭撻せられる先師が今は此世に居られないかと思ふと、何とも云ひしれぬ心淋しさを感じるのである。或時は飄酒をさげ嵐山の花見にお伴をしたこともあり、或時は秋の夜長に燈火をかゝけて先師の机邊に侍して色々と言がたりを聞いたことも幾度であつたか。三十二年の歳月は、さながら夢のやうに過ぎ去つて、當時の少年も今は鬢邊に白髪を見るやうになり、指折り數ふると、同門の秀才も多くは蘭摧玉折の厄に遇ひて、老死瓦全いたづらに往事をしのびて、堪へがたい追懐に耽るのである。

先師はお若い時分から亡父と親交があつたので、數々宅へも來られ茶室にお招きしたこともあつたから、自分も幼い頃からうる覺はして居つたが、直接お目にかゝつて咫尺の間にお話をきくのは、入門の時が初めてであつた。兼て想像して居つた畫人の風采と云ふよりも、體格の立派な頭丈そうなしかも普通の好々爺然と見えたのは意外の感があつた。何にしても畫家の畫室と云ふものを初めて見たのであるから、唯珍らしさうに部屋の周圍を見廻した。一隅に立かけてある大きな枠張りに驚の圖が見事に出来上つて居た。是は市加古博覽會の出品畫であつたことを後に知つた。外に大きな枠に安宅の關で辨慶が勸進帳を讀んで居る圖があつて、先師としてはかなり珍しい圖様であつた。まだ完成して居なかつたやうで、此圖に對して何か頻りに考へて居られる様子であつたが、暫くすると先師は向き直つて自分の畫の研究の容易でないことを説かれて、失くなつたお前の親と同様に思つて指導するから十分勉強せよと嚴かに云ひ聞かされた。傍の紙に櫻谷と書かれて、雅號を定めて貰

ひ若松のお手本を渡されたが、その時自分は何によつてかやうな雅號を命じて下さつたかお尋してみやうと思ひながら、大家の前に初めて出た少年のことで何も云はないでその儘引退つた。

小學校を卒へてから二年程ある學校に居つた自分は、畫塾の空氣に初めて浸つて何だか時代の異つた天地を見る様であつた。二階と下の二室に七八名の通學生と三四名の寄宿生が居て、落款がどうか仕置がどうか、筆力があるとかないとか、語合ひつゝ運筆の練習をして居るもの、粉本を寫して居るもの、花や鳥の寫生をして居るものが皆な十七八歳から二十歳前後の若いものばかりであるに拘らず、悠々緩々として、なる程畫家の卵はこんなものかと思つて、學校でボールを蹴つたり器械體操で飛んだり跳ねたりした時代に比べて、變に思つたこともあつた。新入門のことであつたから隅の方で耻かしさうに運筆の稽古をしながら、折々先輩の仕事を眺めて居た。その頃塾では月に一回づゝ寫生や批評の會があつたが、主として先師の御意見

を聞くだけで互評ではなかつた。尤も此時代は一般に流派とか系統とかを尊重して、圓山、四條、鈴木、鹽川など夫夫用筆まで定つてゐてそれ以外のものは絶對に用ひなかつた位であるから、各流派によつて畫風も截然と分れて居た。展覽會の時などは、各出品畫の枠に各姓名の上へ今尾畫徒とか鈴木社中とか鹽川派幸野梅嶺ととか、六かしい大きな印を捺して流派を標榜してゐたのを記憶する。丁度昔の戰爭に旗幟を立てゝ居るやうに兩々相對峙して居る觀があつて物々しいことであつた。夫故一般に流派以外に出ることは異端者のやうに思はれて、花鳥の先生の門下は皆花鳥を研究し、人物の得意な先生の門下は皆人物を描き、山水を主とする先生の門下は山水をのみ研究して、おかしな話であるが、おのづから繩張がきまつてあつた様である。徳川末期より明治になつて二十六年を経て居るに拘らず、その陋習は猶依然として畫界の全體を支配して日本畫の維新はまだ此頃にでも見られなかつた様で随分窮屈なものであつた。その頃自分はふとある書物で菊池容齋翁の畫論を讀ん

で其中に——畫に流派の別なし、法に拘束せらるゝものもなし、法なく、無法の中に自ら法あり、古畫の粉本を尊重したり

流派の城壁に立籠るのは畫道の賊であるとか、或は法を破つて法を求めよとか、自然の中より新しき自己を求めよとか、文獻によつて時代の研究を深めよとか、書を讀みて人格を高めよとか數箇條に分つて平易な文章で藝術の創造的價値を高唱してあつたのに非常に心酔したのであつた。その後、翁の大作の前賢古賢を見て一層惚れ込んだ爲に塾の研究會にも變な人物畫を出品して皆から種子のやうに思はれたこともあつたが、流石に先師は畫界一般の固陋な考はなく意外にも賞めて貰つたこともあつて當時のうれしさは今猶耳に残つて居る。

その後一年程して先師は寺町松原の奥深い露路の家に移られた。この頃は塾生が最も多く一番活氣のあつた時代であり随分特色のある塾生もあつたが、不思議なほど多く死んで當時面白く遊び愉快に勉強した舊友は唯一人位しか残つて居ない。三十年の春秋、如何に有爲の人材を犠牲にし

たかを考へると、悼ましい氣がして泉下の友達が一層なつちかしくなる。

當時畫壇の耆宿森寬齋翁は二十七年に、幸野梅嶺翁は二十八年の春に、岸竹堂翁は三十一年に世を去られた。五十四五歳であつた先師は頗る元氣で、關西の重鎮として名聲がいよゝ高かつた。その頃改革中であつた堺町の畫室が新に出来て程なく移られた。希室技藝員を拜命せられたのは、それより二三年後であつたやうに覚えて居る。

先師の畫は青年時代には百年翁の風格を存して居られたが、壯年の頃より一層寫實に力を注がれて花鳥は兩瀬の風を喜ばれたやうで、其時代の作品に沈澁の影響を受けられた跡が著しく見られるものがある。更に轉じて宋の院體畫にも指を染められ元明の諸家をも窺はれたやうに覺ゆる作品も乏しくない。

先師は平生忠實なる寫實を根柢にして之を洗練せる筆致で縦横に驅使せられたから自然を見て客觀そのまゝを寫

するのではなく、東洋畫特殊の筆致描線によりて之を醇化し個性化して自家獨特の精神的色彩を帯びしむることに努力された。夫故單に繊細なる描寫によりて自然の對象を如實に現す純香觀的な態度ではなかつた様である。熱心に自然を見つめると同時に東洋畫に於ける特殊の筆致は極度に尊重せられて、日本畫は塗るのでない描くものでなければならぬと色彩の調和や形の整ふよりも筆の運用によりて自家獨特の生命を寓せんとして居られた。が併し世の所謂運筆流の未技に感心して古人の形式や流派の傳統を委襲するやうな固陋な無意義なことは決して無かつた。自分が入塾當時にもお手本を買つて運筆の練習に熱中したり、粉本を模寫したりする際には——ソナナ練習を何程勉強しても其人自身の畫は決して出来るものでない、何故實物を見て古人や先聲の、まだ見出して居らない尊いものを見出さぬのか、同じ鳥を見て同じ花を見て、其中に古人も今人もない、自分獨りの世界が見つかる筈である、さもなければ何十年運筆の練習をしても如何程立派な粉本を澤山寫して

も唯それだけでは自分の畫は出来る筈がない——と散々叱られたことを覚えて居る。夫故先師は壯年時代から和漢の諸家を研究せられたが全然自家樂箱中のものにして渾然として先師独自の表現であつた。

先師の齡六十五を過ぎてから粟の實を幾個かならべて熱心に寫生して居られるのを見たこともあつた。一枝の菊の花を前にして左右から種々の形に寫したり、襖や障子に菊の影をうつしてその形の變化を察したりして居られるのを見た。或時は二階の畫室から屋根にとまつて居る二三羽の雀を先師自身雀になられたやうに氣拔のした態度でジツと見つめて居られることもあつた。帝室技藝員で畫名既に一世に高かつた大家であつて猶且つ一畫學生のやうな態度で居られたに徴しても、如何に自然を忠實に見られたか、と知らるゝであらう。

人物も描かれ山水も數々描かれた。殊に山水畫は南宗味を多量に含んで居つたのは、或は師百年翁の晩年の感化もあつたらうが、世上唯花鳥の大家の標にのみ見て居る人

も多いが、實は南宗味のある山水畫に非常に傑作があつたと思ふ。陸包山の畫に見るやうな樹法や石法を枯渴な筆致でかゝれた長條幅を見たこともあつた。ある時は盛茂樺のやうな筆致を以て得意の紙本に秀潤な墨氣を運ばれたのを見たこともあつた。入塾當時に美濃紙半面大の紙本の畫帖に種々の山水を百圓程描かれたものを見て特に先師に請ふて模寫したことがあつた。夫は一々梅圓筆致を異にして細密な描寫もあり奔放な筆致もあり、水墨もあり青緑もあり先師が十分樂みて描かれたもので、全帖を通じて南宗味を帯びた傑作であつた。山水畫に於ける先師の手腕を窺ふべき好箇のものであつたが、今果して何人の手に歸して居るやら所在を知らない。當時自分の寫した模本も友人數名に貸して轉々して居る間に全部その行方を失つて一枚も手元に存して居らないから、おぼろげなりに其おもかけに接することが出来ないのが残念である。

溫雅娟秀の筆であつて豪健博大を兼て居られた。花鳥畫も四條系統以外に筆致の強みと生動の趣があつた。特に唐

紙畫仙紙を描きこなすことは實に手に入つたもので、南畫にあらす北畫にあらす先師獨特の韻致があつた。南禪寺の九龍や御大典の軟障の老松圖は、共に老年病後の大作であり、且つ病の爲に久しく筆を棄て、居られた先師とは誰も思はぬ程雄健の筆老蒼の趣があつた。いづれも先師の大手腕を揮はれたもので一代に光彩を添へる大作であるが、病餘旬日の間に出来たものとは誰も思ふものはなからう。

先師は極めて純樸な率直なありのまゝの性格であつたら、如何なる席でも、人の前でも言ひたきことは正直に飾らず言はれて時には傍に居るものがヒヤ／＼することが少くなかつた。近時の畫壇のやうに社交に巧み策略もあり所謂世渡りに賢明な人や、辭令に巧妙であつてうまく對者の心理を捉へるやうな人の多い中では實に稀に見るウブな性格であつた。平生から唯實技の研究にとめて空疎な理論にのみ奔ることは頗る嫌であつたから、如何なる方面の人でも理窟つばい人は概して好まれなかつた様であつた。先

師自らが辯の人でなくして筆の人であつたから、あまり理窟は言はれなかつたが自ら信じて居られたことは一步も上げられぬネブリゾサがあつた。それ故展覽會の審査などの場合でも常に自説を固く持して思ふまゝに直言せられる爲に、非常に頑固な風に誤解して居る人も少くないやうであるが、世間によくある頑迷固陋な性格では決してなかつた。例令は出品畫の草稿などに對しても——コンナなものも失敗するから止めた方がよからうとか、何か他の圖にでも變更した方がよからう——と注意を受けた時に、自分もまた固く信ずる所を曲げずに——先生の御注意は有難うございませぬが私は失敗することは覺悟ですから、兎も角自分の信ずるだけはやつて見ます——と折角の御注意に背くとは思ひながらも自信を固く動かさない時に先師は必ず御機嫌がよくなかつた。かやうな場合が度々あつたが、是とて師匠が弟子の失敗を案じられる一種の老婆心で、かりにも先師の形式にはめやうとか、御自身の好まれる畫題に改めさせやうとか、左様な固陋な偏狹な點は少しもなかつたか

ら、製作が出来てから見ていたゞくと非常な好感を以て批評もし、場合によりては意外に賞揚して貰ふことが度々あつた。

今から十五六年も前のことであつた。或る好事家が先師に四季の月圖を依頼した。先師も力を入れて紙本半切に何等の配景もなしに唯月のみを描かれて、四季とり／＼の趣が十分に現れて居つた傑作であつたが、先師は之が表装裂に、落花とか飛雪とか季節それ／＼の景物を自分に描き添へよとの命があつた。その時自分は少し考があつて其まゝにお引受けはしなかつた。且つ失禮だと思ひながら使の人に かやうな返事をしたのである——四季の月を何の景物もなしに、唯月のみを簡單な水墨で現はすことは非常な手柄を要すること、先生のやうな名人で初めてかゝる傑作が出来たのである。然るにその表装に自分が落花とか飛雪とか季節によつて、それ／＼景物を添へることは蛇足も甚しいのみならず、全然畫趣を毀けることであり、寧ろ春とか秋とか、明瞭に張札をして説明する方が優つて居るから、か

かることは門人として却て先生の傑作を損することになるのである、自分で心づいた上は假令先生の御命でもお引受けすることは出来難い。應舉の四季の月の表装に子の應瑞が景物を描き添へた例もあるが、かやうな無意義な非藝術な仕事は古人に倣ふ必要もなからう。考へると却て先生に對して申譯のないことになるから固く御辭退する——と再度迄お断りしたことがあつたが、先師は定めては機嫌を損じられたことゝ竊に心配して居たが、その後何のお小言もなく一年餘を過ぎた後で自分も忘れて居た頃に、舊友某氏が偶然先師を東京の旅寓に訪ねて四方山の話をした時、先師は何かの談話のついでに此ことを某氏に語られて意外にも喜んで居られたことを知り、今更ながら先師が門下後輩の言をも快く容れられて、却てその無禮をとがめられなかつた雅量に吾知らず涙を流したことがあつた。かゝる事から考へても世間で往々誤解して居る様な、頑固一徹の性質では全然なかつたことが知られるのである。平生は濃厚な一面に、可成開かぬ氣質で自説を輕々しく動かされぬに

拘らず、人の言を容るゝにも決して吝なことは無かつた。

且つ一般に自負心のつよい藝術家の常として、先輩や同年輩のものに對しても兎角批難して譽めるよりも貶して自ら高く擡置する癖が多いに拘らず、先輩は平生森寬齋翁の人格畫品二つながら高きに推服して居られた。富岡鐵齋翁の畫を眞に筆あり生命ある作はかゝるものを言ふのであると感嘆して居られた。橋本雅邦翁の莊重にして品位ある筆致を推賞して居られたことなど記憶して居る。相當修養ある藝術家でも學者でも、人の長所を認めるよりも動もすれば短所のみ拾ひたがるものであるが、先師の如きは實に寛厚な長者の風があつたと言つてよからう。

或者は先師を評して運根鈍の三者を大成した人であると評して居るさうであるが、これも大變な見違ひであると思ふ。先師が初めて家を二條釜座に持たれて、當時自炊生活で随分苦學して不斷の努力を續けられ、根氣よく好運命に到達せられた一生涯は、根と運とは或は當つて居るかも知



れないが、鈍の大成とは如何にしても思はれない。云ふまでもなく評者の所謂鈍とは、才の反対で根柢なき罵評に過ぎないと思ふ。

先師が百年翁より受けられた畫風を脱して全然異つた独自の畫境を拓き、當時京洛に瀟漫せる圓山四條の末流など、概して纖弱卑俗なる畫風以外に支那畫の趣致を加へて、溫雅秀麗なる花鳥畫や、蕭散な老蒼な山水畫や、小品大作往くとして可ならざるなき點より見れば、實に異常な畫才と云はねばならぬ。鈍の大成などは誤れるも甚しい。唯何處までも力の人であつて、剪裁補綴を巧にする小器用な才子から見れば、先師の如きは或は鈍の大成の如くに誤解せられたかも知れないが眞に先師を知らぬものと言である。

先師は極めて眞面目な性格で、一生健實な歩みを續けて空論より實行を先にし、黙々として何等の奇を衒はず従つて逸事奇行とか云ふものはあまり無かつた様である。同門であつた松年翁が豪放自ら喜び、強ひて諸家を罵倒して自ら高く標置せしことや、米僊翁が才子として通人として時

代の變遷に伴ひ、新潮流に乗じて其洒脫な性格と圓滑な社交によりて名聲の早く揚りしに拘らず、先師は獨り黙々として畫筆をとり、他人から見れば遅々たる牛歩を續けられ、固く自ら信ずる所を持して終には光輝ある大成を贏ち得られたのであらう。

何事にも眞面目な態度で居られたから、如何なる一時的の遊戯にでも眞剣で全力を傾注される熱中であつた。或る年の新年會の餘興に、門人達が抽籤で各自鳥獸の姿體と鳴聲を眞似ることがあつた。籤にあつたものは大抵笑ひながら、皆一時のお茶濁しをやる不眞面目な態度であつたから、先師はあきたらず思はれ、自ら立つて鶏の鳴く時の特殊な姿と鳴聲とを巧にまねて、汗を流さんばかり眞剣に全力を注がれた。かゝる一時的の座興にでも、本領の藝術に對する時と同じ態度で門人にその範を示されて且つ——一時的の遊戯にでも皆のやうに不眞面目な態度ではいけないと叱られて、新年早々大に恐縮したことがあつた。

盆裁は若い時からお好であつたが、晩年は大抵人手にま

た。

かして居られたやうであつた。論曲もお好きであつたが、

晩年は茶道と論曲と鼓とに非常な凝りかたで、その熱心なことは驚くほどであつた。時折先師をお訪ねしても、よく御自慢話が出たことがあつた。自分も茶は好きであり、論曲も決して嫌ではないが、近來世間の人を見ると茶道を好み茶人顔をしてゐる人でも、眞に茶味を解してゐるものは存外少く唯道具の自慢やら、脫俗ぶりを強ひて街ぶ連中が多い様であり、論曲や鼓も随分一般的に流行してゐるが、近頃は教ゆるものも、教へられるものも品性が著しく低下して趣味の半面には眉をひそめる醜事も少くない爲に、自分ばかりの方面にあまり深入することを好まなかつたのみならず、自分の趣味としては夫以上のものがあつた。それは外でもない、古武器を集め、古書、古法帖をあさり儒者の筆蹟や遺著を集めて古人を尙友することである。社交の廣くない自分としては、是以上の樂もなく、夫故先師晩年の趣味とは多少添はなかつた點をいつも遺憾に思つて居

元來先師はあまり社交を喜ばれず、獨黙々として畫筆をとることを唯一の樂として居られたから、畫家の間に於ける交際もあまり廣くはなかつた爲に、實際とは誤つた見方をして居つた人も随分あつたやうである。殊に先師の世を去られた後、新聞雜誌などの上に散見する記事の中にも、先師生前にあまり交情のよくなかつた人の批評などに、眞に先師を知らなかつたことが傳へられて居たから、少し先師の思出や當時の追憶を書きつけてみたが、是とて唯自分の眼に映じた先師の一部分で、それさへ誤つた見方をして先師に對して甚だ禮を缺くことになるのみならず、あの御性格として定めて泉下から——俺を誹るものは勝手に誹るがよい、本當の俺を知つてゐる人も多少はあるからそんなきつとお叱りを受けることであらう。先師と同時代のある畫家などは、動もすると先師が友禪の下繪をかゝれたとか、學問がなかつたとか、その人格を傷くるやうなことを云つ

てゐるが、是はこれらの畫家の傑として、唯自家をエラク見せんが爲に他を罵倒して世俗を驚かす一種の廣告手段に過ぎないのである。

先師が壯年時代に、友禪の下繪を描かれたと罵倒する人は、當時の事情、實に已むを得なかつたことを知らぬのであらうか。明治維新後は、勿論十餘年頃までは美術は殆んど地に墜ちて、極めて少數の鑑賞家の外は誰も顧るものはなく、當路の人も外國の文物を輸入することにのみ急であつて、古來の名品が二束三文で海外に賣飛ばされた時代であつたから、京都では松年翁とか玉泉翁とかの如く家に餘財あり、父祖の餘澤に浴するものはいざ知らず、さもなければ自家の研究の爲には何とかして生活の方法をとらねばならず、世間が美術を閑却して作家に無理解な時代には、熱心な畫家は本領を研究するために自活手段の體性をはらつて、此苦境と闘ふたのである。竹堂翁がおなじく友禪の下繪をかき、寬齋翁が路頭に畫扇を賣られ、雅邦翁が製圖課の下役につとめられたり、草堂翁が紙萬の繪をかいて江

戸で賣られたりして、幾多の有爲なる藝術家がその材を藏して逆境に沈淪しながら、藝術の精進を怠らなかつた苦悶時代であるから笑ふべきことでないのみならず、却てそれだけ大成せられた後に光輝を添へる挿話であつて、父祖の餘澤で安全に研究したものより、どれ程意義があるかしかない。先師が青年時代に自炊生活をせられた頃は此の苦境と闘つて、いかに研究に努力せられたか察せられるのである。

これも或人の話に先師に學問がなかつたとか云つてゐるが、これも實際は決してそうでなかつた。鷹司家の侍講で且つ維新の志士として有名な三國幽眠翁について、學ばれたから其造詣もあさくなかつた。白髮音韻、さながら仙翁を見るやうな幽眠翁が、晩年に侍者を従へ杖をついて、度度先師の宅を訪ねられて、自分は空關に迎へたことをよく覺へてゐる。師弟對座して談話せられるのを味しく思ふたことも、まだ昨日のやうであるのに、幽眠翁の墓本は既に拱し、先師もまた泉下の人となられた。畫技を受けられた

百年翁が學問のあつた人であるから、その感化を受けられたことも少くなかつたであらう。殊に書道には趣味が深く、青年時代に百年翁の塾で明の陳白沙の狂草の幅を見て非常に感激して、双鉤填墨でさながら眞蹟のやうに模寫されたものを見た時に、先師から色々當時の感想を聞いたこともあつた。青年の畫學生時代から畫の研究以外に書に對しても随分心掛が深かつたのである。その書風は大體に於て百年翁の、中年以後晩年頃の風によく似てゐて猶一段の溫秀味を加へた様で、畫家としては珍しい位見事な筆蹟であつた。先師を訪ねて燈下に畫論を聞いてゐる時にも、往々古人の書に關した品評などの出た事を記憶してゐる。

明治二十八年の内國勸業博覽會が京都に開かれたのは、丁度自分が先師の塾に入つてから一年あまり後であつた。世間は日清戦争が連戦連勝の爲め飛報相續して得意の絶頂であり、随分すばらしい元氣であつた。今の岡崎の圖書館、商品陳列館や動物園のあたりで、夫までは大根や南瓜の名

物であつた品の中に其頃としては大規模の設計で、かなり人目を驚かしたものである。其一部の美術館がまた當時にあつて畫界に一時期を劃するものであつた。第一に斯界の耳目を聳動したのは、東西の各五大家が何でも岩崎家あたりかの依頼で、十双の屏風に得意の筆を揮つて場内に偉觀を添へた。東では橋本雅邦、野口幽谷、瀧和亭、川端玉章、松本楓湖、西では岸竹堂、先師及鈴木松年、森川曾文の諸大家であつた。寬齋翁は一年程前に、模嶺翁はこの年の一月頃に世を去られて見ることが出来なかつた。審査の結果は雅邦翁の十六羅漢圖が一等妙技賞で、その他の諸大家が二等妙技賞になり三等妙技賞は、東では小堀新音氏の宇治橋戦争圖と村田丹波氏の富士卷狩圖で、西では竹内栖鳳氏の山水圖、山元春舉氏の雪景圖、菊池芳文氏の文珠圖、谷口香蟠氏の釋迦圖、川合玉堂氏の鷄飼圖であつた様に記憶する。寺崎廣業氏は宗山の號で一等褒狀、山田敬中氏も一等褒狀であつた。今日盛名ある下村觀山氏も横山大觀氏も共に出品も見なかつたしこの頃には京都ではまだあまり名

聲を聞かなんだ。この會で尤も世論の甚々を極めたのは、日本畫では雅邦翁の龍虎屏風と、洋畫では黒田清輝氏の裸體畫であつた。龍虎圖に對しては龍の面が變だとか、普通三つである爪が五つあるのが間違つて居るとか、虎の骨格が悪いとか腰が抜けた様だとか、見なれた龍虎圖の概念から割出して翁の創意のある所を、何か約束でも間違へた様に口を極めて罵つたものであつた。今から考へると當時の批評界もまた頗る振つたものであつた。前記の東西十大家は當時の審査員であつたが遺憾ながらまた同様の見方で、折角翁の苦心も努力も認められず、今迄に見たことのない變な龍虎の圖位に見られて賞に入らずして却て翁の筆として温健な十六羅漢の方が一等賞に入つたのであつた。天下の批評家畫家が擧つて非難してゐる中に、獨り大阪朝日新聞の客員故高橋健三氏が大朝紙上に大論文を發表して、審査員が却て龍虎圖に審査されて落第したものである自家の無鑑識を天下に表白したものだとか、此屏風を藏する岩崎氏は其巨大な官よりも一雙の龍虎圖の方が偉大であるとか

である。

此會で先師の出品された屏風は、耶馬溪圖であつたが當時先師はまだ耶馬溪に遊ばれなかつたが中津から來て居つた門下生から其絶勝を聞かれて、山陽翁の記文や何かによつて心遊のおもむちを描き出されたものであつた。實景の耶馬溪でなくして先師の靈眼に映じた所謂胸中の丘壑を自由に揮灑せられたので、實景以上の面白味があるとの世評を聞いた様に覺へて居る。峰巒の奇趣は固よりなれども殊に水の流が巧妙を極めてあつた様で、涼々の響を聞く思がした。先師が中年時代の大作の一つであらう。

翌二十九年には東京に繪畫協會が設立せられ、更に岡倉覺三氏、橋本雅邦翁などによりて日本美術院が起つて、盛に新しき藝術が鼓吹せられ従來の美術協會に對抗して、茲に新舊藝術の鬭争が開かれた。京都にありては二十九年に全國青年繪畫共進會が開設されて東京から廣業、敬中、丹陵の三氏が審査員として参加された。翌三十年には後素協會が成立して都下の各派を合同し、従來の流派的觀念を脱

非常に痛快なる名論文であつたことを記憶する。黒田氏の裸體畫も今迄に見なれぬ點から世論甚々の中に撤回される様に迄なつたが、審査總長の九鬼氏の意見で其儘になつたとか聞いて居つた。川合玉堂氏は當時既にその俊才を認められてあつたが、此會で鶴岡圖が三等賞になつてから年齢二十五六歳として異數なりとし一居天下の耳目を驚かしたのである。自分は當時子供がりて出品する力はもとよりなく、評判の作品を幾度も見にいづたよけであつたが、小堀氏の宇治橋戰爭圖は今も目に殘つてゐる立派なもので、その頃自分のわからぬ目に一番好きな繪であつた爲に會場に行く毎に此屏風の前に長時間佇んで居つた。尤も歴史畫と云へば歴史の附圖の如くに解して、一々文獻に徴して事實を誤らぬことを第一條件として、丁度花鳥動物の畫も一も二もなく實物を標準として可否を決したと同じであつたが、此頃から畫壇も批評界も氣運一轉して面目を更めて來たことを思へば、此會は明治時代の畫界に一時期を劃した動機であつた様で今から考へると殆んど隔世の感がするの

して漸次新しき傾向を帯びて來た。兎に角此博覽會は日本畫壇に一時期を劃したものであつた。

自分より先輩の門人では、畫家としてよりも彫金の名手として世に知られた東京美術學校の教授故海野美盛氏があつた。一兩年程師宅に寄宿して居られたさうだが、自分の入塾とは大分時代が違つて、同氏の晩年に兩三回會つた位である。豪放磊落で斗酒も辭せざる慨があつた。

今一人自分と同時代の人で、一年程塾内で共に勉強して居つた友人に、短命なる考古學者として世に惜まるゝ平子鐸嶺氏があつたことは世間ではあまり知らない様である。氏は自分より一二年長者の十八歳であつた。三重中學を中途退學して自分より一ヶ月早く入塾したのであるから、共に先師のお伴をして嵯峨に花見をしたこともあり、五六人の塾友と共に愛宕山に登り空也瀧に遊んだこともあつた。瘦せたソツ齒の馬の様な長い顔をした、神經質のキカヌ氣で、頗るヤンチャであつたことを記憶する。其頃は月琴を

好んで、スイチャンホー／＼とか常に月琴の譜を口にしながら寫生して居つたのをよく見たが、中々の才物で證書を好み議論に長じ、當時皆おとなしい塾生の中で獨り辛辣な皮肉を吐いて随分物議り顔をしたから、塾の一部からは平子は高慢な男だなど、あまり快く思はれて居なかつた様であつた。その頃は鶴友と號して居つた。ある年の春、自分と共に初めての出品畫を描いたことがあつた。師宅の茶の間に席をならべて自分は菊花に小禽を描き、平子氏は紅葉に啄木鳥を描いて居つたが、數々の失敗で如何に勝氣の君も大にヘコタレて、終に先師の助筆を乞ふて居つたこともあつた。短い期間であつたが自分はカナリ懇意に往來して居つたが、君は平生口癖の様に——僕は將來古實を研究して、川崎千虎翁の様な仕事をやりたい——と言つて居つた。繪は繊細な筆を使つてあまり上手とは思はれなうだが、其後東京美術學校に入つて日本畫と洋畫とを卒業してゐながら、畫家にはならず、殆んど獨學で理想通りの考古學者に大成して、得意の佛教美術で學界に堂々の論陣を張り、

少年時代のキカヌ氣を縱横に發揮してゐた。神經質であつたが平常は随分無頓着な風もあつたに拘らず不思議な程讀書を大切に、自分など度々君の下宿に遊んで其所蔵の書物を見る時など持ち方が悪いとか、紙のメクリ方がよくないとか、ソ一押へつけて見て呉れるなとか、數々小言を聞かされて、割に氣の小さい男だと思つたことを覺へてゐる。其頃から淋巴腺結核とかで悲觀して居つたこともあつたが、後年に矢張り結核の爲に惜しい命を奪はれたさうである。

一別以來長く出遇すに居つて、佛教美術の研究者として大名を耳にし其議論を讀みもし、一度機會を得たら訪ねたいと思ひながら終に其機を逸して舊交をつぐことが出来なかつたのは遺憾である。畏友結城素明氏は、平子氏と美術學校の同窓であつたらしく、後に素明氏より色々君の談を聞いて愈舊友がなつかしく思はれた。海野氏と平子氏とは先師の門下にあつて、變りもので且つ最も優れた素質の人で同門の誇りとする所である。現時畫壇の重鎮である川合

玉堂氏は、其國たしか二十四五歳の青年作家であつたが、當時既に其才鋒を世に認められて居られた。今尾塾の誰かに用談があつてか、兩三度塾を訪ねられたのを見受けたことがあつた。眉目清秀の見るから才氣の煥發たる風であつたが、入門當時まだ少年であつた自分は、友人から彼のことを幸野塾の秀才として知らるゝ川合氏であると聞いて背後から同氏の言動に注意してゐたことがあつた。當時御苑内に開かれた京都博覽會に、二番讀兵書圖を出品されて評判のよかつたのも其頃であつたらう。

是もまた同じ頃のことであつた。ある日先師から絹本と紙本と二幀に揮毫したものを示された。紙本の方は何の圖であつたか忘れたが、絹本の方は尺五か尺八位で、陶弘景であつたが、松下に笠を吹いてゐて童子が傍に侍してゐる圖であつた。年少の人の筆とは思はれない位老成の出来であつた。先師が——これは東京の平福穂庵氏の息であるが、父君が歿せられて暫時京都に勉強に來る様子で紹介者から此作品を送つて來たが、年の若いに似たしかな腕がある

と賞めて居られた。自分もかゝる立派な人が見へて共に切磋研究することが出来たら結構だと、心算かに喜んで居つた甲斐もなく何彼の事情で終に見へなかつたが、此少年が現時畫壇の奇才と目せられる畏友百穂君であつたことを後に知つた。

元來真面目な性格の先師には、奇行逸話が、つたものはあまり無かつたやうであるが、一つ面白い話がある。コンナ事を書く時はまた先師に叱られるかも知れないが、其性格の一面を知ること出来るであらう。ある門人に頗る辯論に長じたものがあつた。塾の研究會の事か何かで、ある晩に先師を訪ねて例の如く滔々と雄辯をよるつた。元來理屈や議論のお嫌な先師は、唯ウン／＼とうなづかれるのみで一言も發せられぬから、門人は益々得意になつて其意見を長時間述べた後、先師の最後の賛否を待つた。沈黙少時の後、突如として霹靂のやうな響が論客の耳朵を破つた。言ふまでもなく先師得意の一發を放たれたのであつた。



流石の雄辯家も空いた口がふさがらず、無言の一發に啞然として引さがつたとは如何にも奇抜な辯法で先師でなければ出来ない藝である。自分は今でも此ことを思ひ出す毎に矢笑を禁じ得ないのである。

退辭八十氣新姿、巨腕揮來捲怒濤、老鶴遽然飛不返、一聲清淚入雲高。

人權當代兼師宗、一夜仙遊恨萬重、雄筆長留瀾刺裏、靈魂定議化蒼龍。

無奈東泉路已分、招魂何處拜師君、秋日日落風聲寂、孤雁哀鳴不耐聞。

涓滴未開海嶽恩、追懷往事暗銷魂、秋宵猶記挑燈坐、數侍先師聽畫論。

行吟相伴趁春晴、瀟酒併傾師弟情、三十餘年如一夢、何堪環坐踏門盟。

三十年前初叩門、半生浴得至情溫、迂愚誤事空高壽、不識何顏

謝九原。

權兄近逝 先、更宿師翁歸九泉、揮淚如今誰語舊、同心唯有龜研田。

春日侍師歌話長、秋宵夢覺忽悲傷、浮生半歲須臾變、月色依然照畫堂。

自別阿翁三十春、先生又作玉樓人、傷心來拜南禪寺、師父墳臺接地隣。

從遊世幾髮毛衰、碌々非才何所爲、荷得相肩恩又大、溫容父說是嚴師。

去歲講師面色鮮、迎新舊舊侍爐邊、何圖今日年華改、孤影傷心拜墓前。

淑氣晚來何所求、梅花未綻鳥聲愁、東泉又解香心結、滿眼風光轉似秋。

憶當年先生

櫻谷木島實

拜草



ル・ナスベ・ル・ベルア

ン サ ツ デ